フルーツパーラーの考現学

楠田恵美

1．問題の所在

関東大震災後の東京の変貌を象徴する出来事として銀座の台頭が挙げられる。このことは現在の東京論では定説であるが，当時代を生きていた人々や都市のなかで活動していた人々には仮説の段階であり，観察する都市と経験する都市は共有されていた。関東大震災の後に今和次郎と吉田謙吉を中心に誕生した考現学は，この仮説を検証するための試みであり，それぞれの調査は都市に溶け込むこと，すなわち見る／見られる身体，遊歩者あるいは消費者として都市のなかに再参入することを通じて実行された。都市に対して同時代的に都市論的試みを遂行することはこのような複合的な都市論的身体の問題を立ち上げる。

本論文では，最初の組織的な考現学調査である『1925年初夏東京銀座街風俗記録』（以下『銀座調査』と略す[1]）を読み解きながら，調査地の銀座を考現学を立ち上がらせる台座として捉え，なかでも彼らの調査の拠点となった千疋屋フルーツパーラーに着目しつつ，その台座の性質と考現学的身体との関係がいかなるものであるかを考察する。

「銀座調査」は，1925年5月7，9，11，16日（23，24，25日は吉田による単独調査）の計4日間にわたって実施された。4日間の調査のうち，11日（大正天皇の銀婚式で臨時の祝日）が焦点となり，今，吉田のほか10名を超える調査部隊が結成され，尾張町交差点（現銀座四丁目交差点）近くの千疋屋二階がこの調査のために貸し切られた。本調査では基本的に，京橋から新橋間の約1kmの歩道を南北に往復しながら，すれ違う歩行者の特徴を分類別に把握し，数量化するという方法が採られた。具体的には，髭や化粧，顔の表情，靴，着物，持ち物など，視覚的に得られる諸特徴をそれぞれ数え上げ，これらの採集されたデータは統計化された後，図表に可視化された。

このような今らの調査方法について，佐藤健二は，同じく道を歩き，道にたたずむことでありながら，様々な位相がありうる，であればこそ，対象の位相にあった方法を選ばねばならなかったとし，調査の対象となる地域によって異なる調査方法が採られたこと，さらにおなじ地域のなかでも個体差が生じることを，その背景にある「生活」の差異に求めたと指摘している（佐藤1986；337-338）。

考現学における「生活」の概念は広く，都市に現れる，現代社会を象徴するような集合的な都市生活を指す場合，あるいは，都市において個別の差異を現象させるような家庭生活を指す場合がある。「銀座調査」の場合には，前者に当たり，都市生活にまつわる調査として位置づけられよう。そして，この調査の際に採られるべくして採られた方法，すなわち，この地域で最もあやしまれずにでき，かつ，ふさわしい方法[2]こそが，対象地域の身体のあり方を体現するものであるといえよう。したがって「銀座調査」において，考現学的身体とその台座とを結ぶ振る舞いとして採られた，今を中心になされた街路を歩いて行う統計調査，吉田を中心になされた街路で立ち止まって，あるいは室内で行う断片調査の二つの方法は，銀ブラの再現となっていたはずだ。

本論文では，「銀座調査」を考現学的身体が遊歩者そして，あるいは消費者としてあたかも都市に溶け込んでいるかのように振舞うことにより可能となる調査であると仮定し，本調査で採られた，写真撮影でも聞き取りでもない，目で見て手で描くスケッチという技法について，この技法がもつ特有の都市表象の方法が，都市に対する感覚のあり方といかに結びついているのか，その関連性について注目しながら，本調査で選択された調査の台座であるフルーツパーラーの空間的特性を明らかにしたい。そして，考現学の方法論的特質へ捉え返してゆきたい。

2．「モダン都市」への変貌

1923（大正12）年９月に発生した関東大震災から，1925（大正14）年５月に実施された「銀座調査」までの大よそ一年半の月日は，突如として廃墟と化した東京に考現学者らが登場するまでの潜伏期でもある。この期間において，東京にはバラックの建物が林立し，今和次郎と吉田謙吉は，スケッチブックを携え歩きまわりながら，これらのバラックをスケッチして廻っていた。後に，彼らはこれらの暫定的な建物に美観を施す目的から，他のメンバーを加えてバラック装飾社を結成し，バラックの塗装を行った。彼らはそこで都市の美術家としての役割を果たそうとしていた。

震災からの復興の見通しがたつ頃には，新しい都市に相応の新しい文化や流行が芽生えてきていた[3]。目的もなく都市を歩くこと，あるいは歩くことそれ自体を目的とする人々の登場である[4]。それらの人々のなかでもとりわけ目立つ存在であったのが奇抜な装いで街路を闊歩するモボやモガと呼ばれる人々であった。以下の文章にも示されているように，彼らの舞台となった銀座は，カフェや喫茶店が相次いで開店し，三つの百貨店も進出するなど，他の盛り場に抜きん出た繁栄を呈し，その様は復興後の東京を象徴していた。

> 復興は直ちに着手されたけれども，バラック時代の東京は，旧来の目抜きといわれる場所を多く失ってしまった。星座のように散在していた下町の目抜

きは，多く未だ復興の力足らず平凡な町になってしまった。茅場町，小伝馬町，人形町，通町など前よりは寂れた。これらの欠乏感がすべて銀座へ集まったのである。（安藤1931→1977；25）

バラックのスケッチやバラック装飾の仕事が一段落した今や吉田らは，このような復興後の都市を象徴する銀座に生まれた新しい流行や文化をスケッチする試みに移行した。世の中が急激に変わってきたということを感覚的な印象として受け止めてはいながらも，実際に調査をしてみなければ，どのような新しい事象が目の前に生じているのかを正しく把握しきれない。そのために行われたのが「銀座調査」であった。

建築を単にモノとしてではなく，そこでおこなわれるコトをも含めなければ，本当に建築を見，考えることにはならないとした今の理念からすれば，バラックは，単なるモノとしての魅力よりも，むしろ災害を乗り越えようとする人間の生命力やユニークさを表象するコトに対する魅力があった。であるとすれば，復興後の都市，銀座に対して行われた「銀座調査」においても同様に，今の視線は，新建築自体ではなく，そこをぶらつく人々をも含めた活動的な街の様相に向けられたはずである。それは，震災以前における今のスケッチの対象が，主に地方や農村の，生活とその形象の結びつきが強固な事物であったのに対し，震災直後から取り組まれたバラックのスケッチを通して次第に，かならずしも生活と形象とが一対一で結びつかないような，浮動的な事物に向けられた結果であると考えられる。

震災は，都市それ自体の現われ，そこに集まる人々の現れのどちらもが共に移ろいやすくはかないことを突きつける出来事であり，また記録せねばすぐに消えてしまういきいきとした都市的事象の特性を浮き彫りにした。このような常に流れ行く完成態のない空間に身を投じ，スケッチを行うといういわば挑戦が「銀座調査」には課せられた。この「モダン都市」，銀座に登場した考現学的身体は，新しくなりつつある都市に新しい出で立ちで現われる身体と重なり，考現学の観察の対象となる都市と考現学者の台座となる都市もまた，互いに切り離すことのできない二重性の上に成り立っていた。

3．「モダン都市」における果物屋の台頭

『明治大正史世相篇』のなかで柳田國男は，明治大正期の果物の普及について以下のように言及している。

> 量の側から言ってもあらゆる果樹の増産，これに加うるに外国種の移植，柘榴林檎無花果という類の，以前は唐木として一隅に秘蔵せられたのが，たちまち商品となって町に溢れるに至ったものをもってすれば，よくもこれだけのものを生産する余裕と，消費する能力とが潜んでいたものと，いまさら

に驚歎するばかりである。(柳田1930→1993：86)

柳田によれば以前，菓子は山野に実るコノミのことであり，クダモノは柔らかな果実を意味し，その味わいも，「初期の名称を保持していること」が「滑稽」に思えるほど，現在とは異なるものであった。明治から大正にかけての「大きな変化は，果実がいずれも必然的に甘くなり，それがまた多く消費されるようになったことである」(柳田1930→1993：88)。このように柳田は，人々の果物に対する考え方が転換しようとしていた時期を明治後期とし，その時期における果物の改良と受容の機敏さの要因として，明治末におけるネーブルの輸入による刺激が種の改良を促したこと，そしてかつて想像にも上らなかった輸入果物の味や色形の珍しさが，消費の起爆剤となったことを挙げている。

明治期において外国産の果物の輸入と国内における果物の品種の改良が同時に進展し，目を見張るような果物の普及に結びついたという，果物に対する味覚の転換にかかわる柳田の指摘からは，都市のなかでそれを媒介する果物屋が重要な役割を果たしたことが想像できる。その果物屋は，都市でどのような消費のされ方をしていたのだろうか。

1911（明治44）年に発行された『東京印象記』の一節には「水菓子店の色」という文章が記されている。

> 東京の水菓子店，即ち果物店は，都会の一小美観である。甘味の空気が沈むでゐるやうな，店の内に，狭いにしても色々の果物が，自然の色と光を見せてゐる。それが鮮やかで，真に綺麗だ。(略)
>
> 東京の水菓子舗の夜は，白熱のアセチリン華瓦斯を點けて，累々と置竝ぶ黄や赤や，褐色と紫と白と，柔かい滑らかな光線が，いろゝの果物の肌に浴せ辷つて，唯眼に見入つてさへ，太だ気持ちが好い。甘い，酸いやうな，一種の匂ひも，快く官覚を刺戟する。(略)
>
> 琥珀色の柿，蜜柑，紅いルビーに似た林檎，雪の肌を蔵す梨子，菓子の如な肉厚のバナナ，パインアップル…(略)
>
> 訝伊太利國の上に照輝く太陽と，我が日本の空の太陽と…。(児玉1911；96-98)

著者は果物が並べられた果物屋に対して，その色彩の豊かさや光の具合，独特の匂い，ディスプレイの「感じの良さ」などを感じとり，さらにはイタリアの太陽にまで思いを馳せている。そして，「東京の水菓子屋も，追々舗の飾具合が，その果物と調和して，西洋風になるやうだ」と結んでいる。このことから著者が，果物屋を都市のなかでも一際，色彩や香りの豊かな，異国を喚起させる見世として捉えていたことが窺われる。

続く以下の文章はそのことを端的に指摘している。

千疋屋，ここの店の瓦斯の光，果物の香は明治四十年代の文化には忘れ難い深い印象を与えたものだった。熱帯産の珍奇な果物を豊富に，ノンシャランに並べた店前，実に銀座における異国情調の五十パーセントはこの店が引き受けているのだった。スバル，ザムボアの文学とこの店を引放して考えることは出来ない。

今でも，パパイアに，温室葡萄に銀座人士の味覚をそそるのはこの店の飾窓だ。

震災前は三階建でバルコニーがあり，その上に紅い電燈などが点いていた。二階と三階が有名なフルーツパーラーで，そのころは果物屋の方とは入口が別になっていたが，震災後は二階だけになり，入り口も同じになった。今東京で果物といえばまずこの店である。（安藤1931→1977；215）

以上に挙げた二つの文章では，果物を陳列販売した果物屋の雰囲気が，都市空間に幻想的なイメージを付与したことが述べられている。このような，都市空間における果物店の特質を，以下に挙げる物語ではより進んだ形で明るみに出している。1928（昭和３）年の『赤い鳥』７月号に掲載された，「水菓子屋の要吉」という物語である。「東京の山の手にある，ある盛り場の水菓子屋の小僧」として働く主人公は，地方から上京した少年であり，仕事を通して「方々の国から送られてくるこれらのおいしい熟した果物が店に飾られたまま，毎日毎日こうもたくさん腐っていく」ことに日々心を痛めていた。その要吉をより苦しめる仕事が待ち受けていた。売れ残って腐った果物を夜のうちにこっそりと鉄道線路の向こうにある藪へ捨てに行く仕事を主人に言いつけられたのである。要吉は，バナナさえまだ見たことがない故郷の家族を思いながら，事の理不尽さに対して苦悩している。この大都市の消費生活の論理に翻弄される運命にある主人公と商品果物の物語は，果物屋の醸し出す消費空間が華やかである一方で，そこで売られる果物と果物屋で丁稚奉公させられている主人公の商品としての存在の果敢無さを浮かび上がらせている。

「モダン都市」に現れた新しい果物とそれを展示して見せた果物屋は，都市におけるヴァニタス（静物画）としての側面をもち，印象的で強い存在感を放ちながらも，同時にその空虚を露呈せずにはおかない，生命の儚さ／果敢無さを呈示する見世であった。

４．フルーツパーラーの登場

フルーツパーラーは，果物店の千疋屋が，手づかみで果実を立ち食いしている外国人に，椅子とテーブルを置いて食べさせたのがはじまりで，フルーツパーラーと名乗ったのは大正初め（初田2001；410）であるという一説もあるが，実際

にフルーツパーラーがはじめて東京に登場した確かな年代はよくわかっていない。ただし，それが一種の都市的な商業形式として花開き，人々に受容されたのは震災後であると考えられる。主な果物店をみても新宿の高野では1926(昭和元)年に，神田の万惣では1927（昭和２）年に，渋谷の西村では1934（昭和９）年にそれぞれフルーツパーラーを開設，千疋屋総本店では1925（大正14）年に銀座松屋に，1928（昭和３）年に浅草松屋に，1930（昭和５）年に丸の内海上ビル，伊東屋ビルにそれぞれフルーツパーラーを出店しており，東京の果物店では関東大震災後に，相次いでフルーツパーラーを設けていることがわかる。

以下の事例に示されているように，果物屋にパーラーが併設されることによって，その場で店頭の果物を味わうことが可能となったフルーツパーラーは，喫茶店の一種として人々に受け入れられていたようである。例えば，中谷宇吉郎は随筆のなかで，「先生（寺田寅彦のこと：筆者註）と銀座については，妙にはっきりした印象が，一つ残っている。それは先生と，千疋屋でメロンを食べた場面である」と，銀座千疋屋フルーツパーラーで初めてメロンを口にしたことを回想している。これは1955（昭和30）年に書かれた随筆であり，「もう三十年以上の昔の話」との断りがあるため，大正末期頃の出来事であると推定される。

> メロンという非常に高貴な果物が，その頃初めて千疋屋で売り出された。何処の帰りだったか忘れたが，或る夕方，二，三人の教室の連中と，先生につれられて千疋屋へはいった。
>
> 「何にしようか」と見廻すと，いろいろなものの名前を書いた白い紙片が，たくさんぶら下っていた。その中に「メロン五十銭」と書いたのがあった。メロンの名前は，もちろん知っていたが，それは遠い世界の話で，自分でメロンを食うなどということは，思いもつかなかった。(中谷1955→1988；267-268)

以上の事例のように，そこでメロンなどの果物を食べたこと，あるいは，フルーツポンチを目当てに千疋屋に訪れたというような回想（水原孝『私の銀座昭和史』1988）も見られる。その他，文学作品には，千疋屋にてお見合いをする場面（太宰治『きりぎりす』1940），東京駅に人を見送った後，丸ビルの千疋屋で苺クレイムを食べながら涙を流す場面（徳田秋声『仮装人物』1935）などが見られる。実際，銀座千疋屋フルーツパーラーでは，特注した脚の長いカクテルグラスにパンチ（ヨーロッパで見たリキュールやジンの利いた軽いカクテル）を注ぎさまざまな果物（静岡の温室メロン，甘い新種リンゴのスターキング，岡山の黄桃，地中海産のオレンジやレモン，台湾産のバナナやパイナップルにパパイヤなど）を刻んで盛り飾ったフルーツポンチやフルーツサンデー，フルーツパフェ，フルーツアラモードなど，果物店ならではのメニューを開発するなどの工夫をしていた。

フルーツパーラーでは技巧を凝らした果物を提供し，かつては，諸国の果物を

展示することによって，都市に色彩や香気を添えていた果物屋から，味覚的，視覚的経験の可能な幅を拡大するとともに，パーラーとの字義通り，都市における応接間や談話室として，都市の幅広い人間関係を下支えする空間の一つになり得る可能性を保持していたことが窺える。

フルーツパーラーの萌芽は，一店の果物屋の些細な事情に発端しているに過ぎないかもしれないが，上述のように，他の果物屋も相次いでフルーツパーラーを開設させていることや，独自のメニューの開発に取り組むことで店の個性を創出しようとする試みが展開されており，このことは明らかに関東大震災後の東京における各種喫茶店をはじめとするカフェの増加や流行と軌を一にしており，フルーツパーラーをより大きな都市的文脈のなかで捉えることができる可能性を示唆するものである。

安藤更生は，東京におけるカフェの起源からその普及までを説明した一節のなかで，フルーツパーラーについても触れている。

> 千疋屋がフルーツパーラーを開き，資生堂までランチをやるようになった。かくて銀座には次第に万花咲きみだるるに至ったのである。（安藤1931→1977；79）

このとき，安藤が想定していたカフェの起源とは，カフェプランタンであり，そこは文士や芸術家の集会所やサロンとしての性質が強調されるものであった。サロンとして利用されたカフェは，その時代の思想や文学を育む場所として，大きな役割を果たしていた。当時のカフェは，それ自体が先端的な場所であり，新しいものごとを始めようとする人々を招き入れ，そこから新しいものごとが駆動する可能性を後押しする，象徴的な場所であったといえよう。

今らが考現学を始めるきっかけとなったのもまた，上野山下の山本というカフェにおいてであった。今は考現学のはじまりについて述べた文章において，講義後に学生らとそのカフェのなかで，「このように無から有がでるように伸びていくのだろうが，これを記録しておけば，後の世の，考証家はたすかるだろう。どうだ，やろうか，まず銀座街頭とゆこう，記録をつくる方法論はとっくり考えよう」というので熱心な有志たちといっしょに銀座の実地見学をしたのである（今1971；480）と述べている。考現学のアイデアが生まれ，実際にそのアイデアが実行される場として，上野のカフェやフルーツパーラーが利用されたことは注目に値する。

カフェの場所的性質として，第一に上に述べた談話室としての性格，第二に遊歩の延長としての性格が挙げられる。遊歩の延長としての性格とは，都市で喫茶店やカフェに座って飲食することが，都市の観察者としての座を確保する一つの手段となり得るということである。カフェでは，遊歩者として街を彷徨する時に比べると，より安定した観察の座を得られる。あるいは，儀礼的無関心を装いな

がらも，観察をする身体の座を確保するためには，カフェで飲食するという振る舞いが先行していることが大切であった。

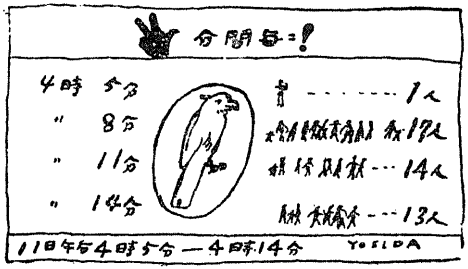
考現学者らが「銀座調査」の本拠地としたのは，銀座４丁目の銀座千疋屋分店のフルーツパーラーであった。そこでは，「二階の一廓を借切にして，お茶も食事も勝手しだいということにし」（今1971；481），今と吉田の二人は「千疋屋の階上で，次々に来る統計伝票を整理したり計算したり，新しい課題を発行したりするために忙し」（吉田1930→1986；51）くしていたという。とはいえ，そこでお茶や食事を摂りながら調査に関わっていたであろうし，また，そこは「銀ブラ党」をも交えた調査者らの集合場所であるとともに控え室でもあったことから，賑やかな雰囲気が漂っていたと推測される。ただし，『銀座調査』には，吉田が千疋屋の窓から行った断片調査が収められていることから，そこが観察の対象から隔離されていたわけではなく，そこも観察を行う台座となっていたことが示されている。

> 千疋屋の階上で，この日の沢山の統計の整理の暇をぬすんで一寸窓からやった調べです。
> 忙し気な夕暮の銀座通行人を，こんなにも大勢呼びとめたオームの，無邪気極まる魅力！
> （略）最初の四時五分では，たった一人しか眺めていなかったのでしたが，三分後の四時八分には，忽ちにして十七人もの人達が召集されてしまひました。（略）私は，次の六分間後の四時十分で，再び十三人に減り，それから更に段々と減って行くのを見下ろし乍ら，一ぷくしました。（吉田1930→1986；53-54）

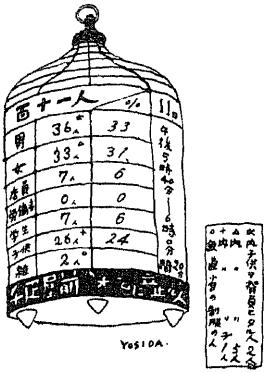
以上は午後４時５分から14分まで，続いて５時40分から６時00分までに，吉田によって行われた，店の前に置かれたオウムの入った鳥かごの前に立ち止まる人の数を数えた調査である。息抜きかたがた行われたとも言えそうなこの「銀座調査」には，建物の二階から，眼下の出来事に興味を示しながらもどこか悠長に構える吉田の姿を想像することができる。千疋屋のなかの考現学者は，一角を貸切にしていたとはいえ，周囲の客と同様，飲食し，自由に視線を操りながら都市そのものを消費する身体を兼ね備えていた。

街路上で歩きながら行われた統計調査は，考現学者が都市を歩く際に目にした事象を数え上げたものだが，調査に添えられたスケッチを含む図表の数々は，視線が選択した身体的特徴のいくつかを部分的に抜き出している。もしこれを写真で行った場合には，視線が選択した特徴を部分的に抜き出すことが非常に困難であるばかりか，類型よりも個性を摘出してしまう。

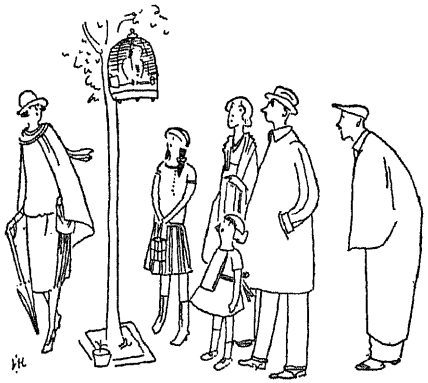
それに対して店の窓からの，あるいは店の中での断片調査は，眼前に広がる都市の移りゆく景色や事象が再現されたものであり，写真では，ある瞬間のある場



『モデルノロジオ』53頁



『モデルノロジオ』54頁



『モデルノロジオ』54頁

面の像を抜き出すのに対して，図表やスケッチの場合には，抜き出された像のうちに時間の経過を含みこませることを可能とする。例えば，上に挙げたオウムの調査のほかにも，不二家を対象になされた断片調査では，店内における客層を洋服男，和服女，学生，子供の別に，それぞれが着席している位置とともに図示されている。さらには，観察者の隣の席に座っていた母親と二人の子供が「出て行った後に残された，飲み物の空虚のスケッチ」（吉田1930→1986；56-57）が付け加えられている。これらの喫茶店で採られた現学的記録の方法とその興味の対象とは，その場所を構成する各要素と，そのうちに含まれる時間的推移であったことがわかる[15]。

「銀座調査」の拠点となった千疋屋フルーツパーラーは，銀ブラの途中に休憩したり，談話に興じたりすることのできる，遊歩を断絶させる空間として捉えうる一方で，同時に，観察の台座と，美しく切り盛りされた果物が提供される，遊歩のまなざしの継続を支える空間としての側面が見出される。フルーツパーラー

に見出されるこの二つの側面が，「銀座調査」を支えていたのではないだろうか。

5．都市の記録術

考現学者らによる考現学採集は，一方では，印象的に過ぎ行く現在を客観的に把握する科学的方法であり，時代を共有する人々にとって，たとえば連日大盛況であったとされる『しらべもの展』[6]や雑誌『アクロス』[7]などに引き継がれた街頭調査にみられるように，現在の都市について知るうえで有効な手段であった。他方で，考現学採集は，今が調査の初頭から後世に残す資料としての価値を主張したように，歴史的資料として過去の都市について知ろうとするうえでも有益である。なおかつ，『銀座調査』には図表と統計，そして文章による説明が用いられ，なかには，調査当時における観察者当人の心境や出立ちなどの情報が付け加えられているため，より克明に考現学者がその時に行った調査の現場の雰囲気を想像することができる。そこでは，採集の図表化と統計化において資料としての客観性を確保しようとする態度と，調査者当人が調査の内部に滑り込もうとする態度の両方が見受けられる。今も吉田も各資料とともにその時の自身の様子や心境を述べている場合が多い『銀座調査』は，結果として，後世から見るとその資料をかえっていきいきとさせる効果を生んでいるように思われる。この記述法が，都市のなかの調査（「銀座調査」）と調査のなかの都市（『銀座調査』）の二側面を保有し，過去の都市を立体的に把握する手立てとなるのである。

以下では「後の考証家」にとっての考現学を足がかりとし，都市を記録することについて考察を進める。都市でどれほどの人がどのように時間を過ごし，そこを去っていったかという個々の痕跡は，その数があまりにも膨大であるために把握することが困難であることを自覚したうえで，それらを一つ一つ採集していこうとするある種の挑戦にも似た試みが，「銀座調査」であったのではあるまいか。それはまた，都市でおこる事象のはかなさを一種の静物画（ヴァニタス）として描き留めておく試みであったのではないだろうか。歴史的資料として『銀座調査』をみると，それは，移ろい消え行くものが偶然に考現学者とすれ違うなかで記録されたものであり，かつ記録されずに消え去った事象が大半を占めるなかでも消え去ることなく残り続けたものの余韻として，そのときの都市の「現在」を想起させる。

このように考現学者の手を介さずとも，都市には，同じように残存する力が付与されたものが少なからず散在している。そのうちの一つに，芳名録と呼ばれるものがある。いろいろな人生のいろいろな局面でその店に立ち寄った客のうち，特別にそこに立ち寄ったことが記録されている有名人らのサイン帳である。

2002年に出版された『フルーツパーラーのお客さん』という作品は，著者，大島幸助の父親がかつて銀座伊東屋の地下でフルーツパーラーを経営していた際に残した芳名録を紐解き，そこにあるサインと日付から各人がそこに立ち寄った際

に置かれていたであろう境遇や，その境遇の背景となる人生を小伝にまとめたものである。フルーツパーラーの「お客様たちによる産物」であるこのサイン帳を介して知りえた彼らの人生を結節するフルーツパーラーのそのものの存在を，著者自身は長らく知りえなかったのだが[8]，かつてフルーツパーラーが確かにそこに存在したことを示すモニュメントとしてこのサイン帳は長らく著者の父親のもとにあり，その後，著者の元に引き継がれた。それを紐解いたとき，著者のなかでフルーツパーラーに立ち寄った数多くの著名人がある関連性のなかで浮かび上がったはずである。

また著者は，1997年にある博物館の展覧会場にて衝撃的な経験をしている[9]。展示物のなかに11種類にも及ぶ銀座伊東屋地下千疋屋フルーツパーラーのマッチラベルを目にし，「驚き，興奮させられた」という。これらのマッチラベルは，いまはなきフルーツパーラーの存在の欠片として著者の前に甦ったのである。著者の目の前に現われたサイン帳とマッチラベルという，二種類の残された都市の断片は，今らによる考現学採集にて残されたものに類似する性質をもつ。サイン帳は，単に著名人の羅列としてではなく，いつ，どのような局面で，あるいは誰と，それらの著名人はフルーツパーラーに来店したのか，サインする際にどのようなことを考えていたか，このような考えに著者の想像を掻き立てたに違いない。展覧会においてマッチ箱と対面した際にも，著者はフルーツパーラーがある時代のある社会のなかで確実に存在したこと，都市空間の広がりのなかでフルーツパーラーが確かに存在したことを実感したであろう。

マッチのラベルは，当時における一種の広告であり，マッチそのものを使い終えるとそのまま捨てられる可能性の高いものである。安藤更生は広告マッチについてこう述べている。「街頭に立って，行き交う人にビラを配ったり，店名入りの小型マッチを渡したりする女たち。（中略）希望者はマッチの方が多いそうだ。ビラの方は前からあることだし，そんなに綺麗なものも少なく，貰った人もすぐ捨てるか鼻をかむかだから張り合いもないが，マッチの方は新職業でもあるし，綺麗なものだし，貰った人も喜ぶというので，若い女たちはマッチの方を多くやりたがるそうである」（安藤1931→1977；61）。ビラよりも綺麗であるというのは，持ち主が使用する際に目立つよう，意匠に凝ったデザインのものがマッチ箱には多かったのである。たばこと塩の博物館の解説では，「マッチは，早くから広告媒体として利用されていたが，大正末から昭和にかけて，主に店舗の宣伝付きのマッチが多く制作される。これらの広告マッチは顧客を中心に無料で配布され，受け取った者がマッチを使うことで，人目に付くことを狙ったものである。どうやら，このころから，マッチは買うものから貰うものに変わっていったようである。勿論商品としてのマッチもあったわけだが，広告マッチが量的には凌駕していた。（中略）現在ほど広告媒体が発達していなかった当時としては，マッチが有効な広告手段の一つであったことは間違いあるまい」[10]と述べられている。この広告マッチもまた大正末期から昭和初期にかけての新しい流行であるととも



『マッチのラベル　ポケットのなかの小宇宙』第77図

に，考現学やフルーツパーラーの出現，そして映画の興隆と時代が一致しており，これらの痕跡の集積から，後世に生きる私たちは，かつての都市空間との交流が可能となる。広告マッチを単なる宣伝媒体としてだけではなく，それがかつて位置したであろう場所とそれを目にし，手にしたであろう人々との関係に位置づけることから，過去の都市の像やドラマが浮かび上がる。

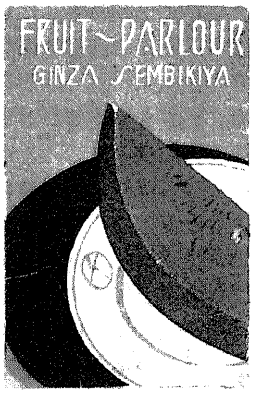
それが実際に試みられたのが，かつて存在した銀座伊東屋地下千疋屋フルーツパーラーの芳名録に記された有名人のサインから，彼，彼女らの生涯をたどった『フルーツパーラーのお客さん』である。同書の説明では，著者の父親が銀座伊東屋地下千疋屋フルーツパーラーの経営に携わった期間は，1930（昭和５）年12月から1936（昭和11）年５月までの５年半であったとされている。同書で紹介される有名人のサインは1931(昭和６)年10月末における寺尾文子にはじまり，1934（昭和９）年（３月から６月の間と推定される）の三代目三遊亭金馬までの34名を数え，時期にして昭和初期のわずか約２年半の期間である。

この一時期，当フルーツパーラーを経営していた私の父が，ある目的をもって芳名帳を用意していたわけだが，来店されたお客様に接して芳名帳にサインをお願いする主役を演じていたのは，活発な若い一女店員さんだったと聞いている。一般のお客さんにまじって，著名な文化人・芸術家・芸能人といった方が見えると，もちろん父の判断もあったろうが，彼女が自発的に例のサイン帳をもってサインをしていただくというケースがかなりあったようである。その女性の名前は知るよしもないし，今ご健在かどうかもわからない。でも芳名帳が現存していること，そこにサインを残された方のうちの多くの方々がその後も大活躍され，輝かしい生涯を送られたこと，その結果このほどこうした小伝集が生まれるに至ったことは，関係者としてかの女店員さんに感謝の気持ちでいっぱいである。

本書の登場人物はバラエティに富んでいるものの，概して舞台俳優さん，

映画俳優さんが多い。また男性スターよりも女性スターが多い。それも当時の若手人気スターに偏している。こうした偏りが生じたのも，かの女店員さんの行動によるところが大きいと思われる。(大島2002；272-273)

芳名録のなかには，1934年「三月六日　珈琲を飲みつつ」と記された長谷川伸のサイン，果汁を用いて彩色された果物の絵とともに収められている藤田嗣治のサインなどがある。画家，エレオノラ・ラグーザ（ラグーザお玉）もまた，サイン帳の紙面いっぱいに即興で日本庭園を描いている。彼女は1933年10月，72歳でイタリアから日本に帰国し，翌月11月13日から19日のあいだ銀座伊東屋にて「ラグーザお玉展覧会」が開かれた際，階下のフルーツパーラーに訪れたと推測されている。このとき，以前彼女の伝記を記し，彼女を一躍有名にした木村毅も同席しており，彼自身はサインとともにドジョウの素描を残している。





『マッチラベル　明治・大正・昭和・燐票博物館』左図127頁，右図142頁

フルーツパーラーの広告マッチが流通していた頃，すなわち大正末期から昭和初期にかけての広告マッチは，その大半を歓楽街の各店のものが占めていたという。フルーツパーラーの芳名録に名を残した映画スターの名も，各種のマッチラベルに窺われる[11]。マッチラベル上においても，フルーツパーラーと芳名録に連なっている名前の交流がなされている。

6．結びに代えて

近代都市をめぐる問題系には視線の問題が常に中心的な位置を占めてきた。それは都市が空間とそこを生きる身体の双方が織り成す場所であり，そこでは諸々の時代の感覚が内在的，外在的に反映されているからである[12]。身体の感覚のな

かでもとりわけ視覚が重要であったのは，それを通してのみ，あるいはそれを通したことが都市の経験を，そして都市を把握することを保証する術であったからである。例えば近代の産物といわれる博覧会はまなざしの特権化される空間であった[13]。また消費の舞台である百貨店は，陳列された商品との対峙[14]によって欲望が喚起されながらも買うことの留保が許される[15]，視覚的効果で満たされた娯楽空間であった。あるいは博覧会や百貨店などの閉じられた空間を超えて都市を彷徨う遊歩者もまた，視覚と思考のスイッチを切り替えながら，あるいは陶酔状態で街路を進んで行った[16]。都市を歩いて楽しむ人々が増加すると，休息所や社交場の数も増える。そのことがまた，座りながらにして都市を観察すること，経験することを可能にした[17]。1925（大正14）年に今和次郎らによって行われた「銀座調査」が第一に歩行者に混じって歩きながら，第二に千疋屋や不二家，松屋などの室内から都市を観察し記録するという方法が採られたことが示唆するように，都市を視覚から把握し，そこから都市の現在を採取しようとする試みにまで発展したことは注目すべき事実である。本論では，この「銀座調査」について，なかでも室内での／からの調査に注目し，観察者の身体とその台座との関係から見出される都市論的身体の問題について考察してきた。

観察者によって採集されようとする都市の断面は，観察者のいま，ここの時空と重なり，その一瞬が切り取られることによって生じ，記録される。これと同様の営みを，身体を介さずに機械にて行うのがカメラである[18]が，観察者とその対象をつなぐ一瞬の同時性を，身体を介して記録することが，今らにとっての都市のリアリティを担保したのであろう。このような都市における日常的感覚を，一つ一つ採集する試みが「銀座調査」であった。考現学者らが街路上で，ふと目に飛び込んできたものに反応するという経験を，ただやり過ごすわけではないにせよ，かといって一つ一つ網羅的に列挙するのではなく，ただ緩やかに採集したことの意義は，おそらく，歩みを止めたときにはじめて，像として眼前に広がるいま，ここにある都市を見出す[19]，あるいは，都市の時間を静止させることを可能にしたという点であろう。閉ざされた自己がそれを包むと時空とともに一つの固有な経験として結びつき[20]，そのときそこが都市と身体をつなぐ固有の場所として立ち現れるのである。都市空間が固有の身体によって見出され，固有の場所として立ち現れるときにはじめてそこが，新たな経験が可能な領域として開かれるのである。

1925（大正14）年の「銀座調査」において，フルーツパーラーが都市の断片を採集するという営みを遂行する本拠地となったのは，当人たちにとっては無意識的になされた選択，あるいは偶然の積み重なった結果ではあったにせよ，これまで論じて来たように，まさしくそこが考現学者的身体の台座となり，同時に考現学者自身も再び都市的身体へと回帰せざるをえないような，多重性を招き寄せる場であったからではないだろうか。そしてさらに，そこで提供されるものが考現学者自身の手からも滑り落ちてゆくような儚なさを備える果物であるという，フ

ルーツパーラーの特質こそ，考現学にふさわしい台座であったように思われる

今和次郎は，考現学に対する世間からの評価に対して以下のような反論を試みている。

> われわれの仕事には，赤，白，黒，如何なるイデオロギー者でも入って来れる。それは個人邸宅の客室の如く構えてはいないで，恰も停車場の待合室の如き状態に置かれている。現にわが考現学同志は，所謂一つの旗の下に集まっているのではない。各自は各自のままに歩いていて，ただ時々待合室然たる考現学台上に集まるだけである。（今1931→1986；14）

そこで，考現学の台座が「停車場の待合室」という言葉で表徴されているように，それは開放的であり，そこに集まる身体もまた個々の都合に対して寛容な態度を兼ね備えていたことを読み取ることができる。今らの考現学は，必ずしも都市のみを対象としたわけではないが，以上のような，「停車場の待合室」で採る態度こそ，都市の現在を観察する際に自然に採られた態度であったとともに，都市そのものの性格を見極める上での方法論的な選択であったと思われる。この考現学者たちが都市の現在を把握するために採用した方法とは，流れ行く時間やそのなかを通過する事物のただなかに身を投じて，観察の対象となる事物との同時性を共有しながら，秘かに，そして「ニヒル」[20]にその時間を描き留めることにほかならなかったのではないだろうか。

その点において，考現学的身体も観察の対象となる身体と同じように都市的身体を行使しつつ，観察に取り組まねばならなかっただろう。かくして，考現学者らは自らの儚さと，対象の儚さを記録するために銀座の街路，なかでもフルーツパーラーからその試みを開始したのだ。そのことはまた，銀座伊東屋地下の千疋屋フルーツパーラーにおいてなされた芳名録の収集においても同様である。店に訪れた有名人にサインを求めた無名の店員は，もう一つの考現学的身体であったといえる。彼女を含む名も無き考現学者らもまた，記録しようとするその対象や意図を異にしていたとはいえ，現在の都市を構成する断片の収集家であることに変わりはないからである。

以上，『銀座調査』やフルーツパーラーの芳名録が，都市という台座そのものの移ろいやすさの上に偶然群れ集まる数々の断片の重なりのなかから生じたことを見てきた。それらの記録装置を作動させた場所，都市で束の間の安定を錯覚させる場所の一つがフルーツパーラーであったのかもしれない。

[註]

(1) 本論中，「銀座調査」を考現学者たちの調査行為に，『銀座調査』を調査報告のテクストに対応させ表記する。

(2) 体系的な調査として「銀座調査」に次いで行われた「本所深川貧民窟付近風

俗採集」(1925年10月８～10日）では，銀座で行われたような服装などの身体的特徴の統計が（あやしまれて不可能ということも含めて）ほとんど行われていない（佐藤1986；338)。

(3) 一般的な目安としての震災復興は1930(昭和５)年。土地区画整理事業は1929(昭和４）年末にほぼ終了し，1930（昭和５）年３月24日に天皇の市内視察，26日には帝都復興完成式典が挙行された。宮城二重橋前広場の会場にて，内務大臣の式辞，天皇による勅語の朗読，万歳三唱が行われた。参列者は５万８千３百余人の招待者のみ，一般市民は式典そのものへの参加はできなかった。しかし，式典前後に行われた，提燈行列や音楽行進，音楽自動車，花電車の行進などの各種行列や，体育大会，舞踏会，映画会などの各種催しには参加することができた。

(4) 『東京風俗志』(1899）を引きながら，佐藤（1994；81-82）も指摘しているように，それ以前の東京では欧米の都市に比べて街路をぶらぶらと歩く人があまりいなかったことから，「銀座調査」それ自体に当時の新しい都市的な流行として生じた銀ブラとの連動性を見出している。

(5) 不二家を対象とした調査は，そこに入る人，出る人，カフェ内部の配置図および客層，客が去った後のテーブルの光景の，カフェに入ってから出るまでの一連の流れを網羅している。

(6) 1927（昭和２）年10月15日から21日まで新宿紀伊国屋書店にて開催された「しらべもの［考現学］展覧会」のこと。

(7) PARCO出版から1977年10月に創刊された月刊雑誌。雑誌は1998年７月号をもって休刊したが，1980年８月に東京の若者のストリートファッションを観測，分析する定点観測を開始，以後現在まで毎月一回の観測が続けられている。そこでは考現学的手法が用いられているとはいえ，写真やインタビューなどの方法も採り入れられている。

(8) 著者は1934（昭和９）年生まれ。著者の父親が銀座伊東屋地下千疋屋フルーツパーラーの経営に携わった期間は1936年までであり，かつ，その後銀座伊東屋は戦災で消失している。

(9) たばこと塩の博物館特別展『吹けば飛ぶよな小さきものたち』1997年４月12日（日）～５月25日（日)。

(10) たばこと塩の博物館ホームページ展示解説より。
http : //www.jti.co.jp/Culture/museum/tokubetu/eventSep/label.html
(2009/01/13)

(11) たとえば，入江たか子，栗島すみ子，田中絹代，鈴木伝明，川崎弘子，榎本健一，夏川静江など。

(12) 「ほかでもないあとの場合のような心理への制約を，道を行き交う交通の繁さやテンポの速い多様な経済・職業・社会活動のにぎわいでもって作りだしながら，大都会は，それだけですでに，精神生活の基盤をなす感覚の面において，

区別するようにできているわれわれ人間の本性に要求される意識の量において，精神と感覚双方の生活が千篇一律の型通りのままゆるゆると流れるリズムを持つ，小さな町や田舎と，歴然たるコントラストをなしている」（ジンメル1903→1999；175）。

(13) 「展示されたモノを，素材，製法，効用，時用，価格等の基準で相互に比較し，有益の品と無益の品を選別していくこと。明治国家が内国博にやって来た民衆に要求したのは，まさにこうした比較・選別するまなざしであった」（吉見1992；126）。

(14) 「百貨店の特質，客はそこで自分を群集と感じる。彼らは陳列された商品の山と対峙する。彼らはすべての階を一目で見わたせる。彼らは定価の金額を支払い，商品の『お取り替え』ができる」（ベンヤミン［A12，5］；123）。

(15) 神野（1994）は，三越の分析を通して百貨店を消費空間としての特質よりもよりもむしろ文化が創造される空間であることを強調しているが，そこは，さまざまな人々がさまざまなことをしながら長い時間をそこで過ごすことのできる娯楽施設としての特性を備えた場所であるといえる。

(16) 「長い時間あてどもなく町をさまよった者はある陶酔感に襲われる。一歩ごとに，歩くこと自体が大きな力をもち始める。それに対して，立ち並ぶ商店の誘惑，ビストロや笑いかける女たちの誘惑はどんどん小さくなる」（ベンヤミン［M1,3］；78）。

(17) 初田（2003）は，関東大震災後の東京にカフェや喫茶店などの休息所，憩いの場所が急激に増えたことを指摘している。喫茶店の建物が道路側にガラスを多く用いた形式のものが多かったことから，窓を通して街を歩く人々の動きや，街のもつ雰囲気，その移り変わりを座って楽しむことができた点に注目している。

(18) 中村（1996）より。

(19) 北田（2000），近森（2005→2007）を参照。

(20) 「もはや一人一人の中の『普遍的人間』ではなく，質において唯一無二であり，他人と取りかえがきかないということが，今では個人の価値を支えるのだ。全体の内部の役割を規定するこの二つの方式が，せめぎ合いからみ合って位置を交換する戦いの中に，われわれの時代の外部と内部の歴史が推移する」（ジンメル1903→1999；199）。

(21) 今は，「とにかく私のニヒルの気分が，震災後のバラック装飾社をやらせたのだし，また，考現学だってニヒルの気分からやりはじめたものにほかならない（川添1987；60から再引用）」と述べている。彼は，「ニヒル」という気分を，自身が工芸図案から模様図案へ転向した際にも震災以後，観察者へ転じた際にも感じていた。そのように述べたのも，彼が自分自身で製作せずにただ見るだけの存在にほかならないことを強く自覚していたためであると考えられる。ただし，その「ニヒル」な感覚は，観察する身体にとっては拭い得ないものであ

ったとしても，後日，観察した記録が有効な資料となることによって克服され得たはずである。

[引用文献・参考文献]

安藤更生 1931→1977『銀座細見』春陽堂→中公文庫
バルト，ロラン 1970→1996宗左近（訳）『表徴の帝国』ちくま学芸文庫
ベンヤミン，ヴァルター 1982→2003今村仁司・三島憲一（訳）『パサージュ論 1，3』岩波現代文庫
近森高明 2007『ベンヤミンの迷宮都市』世界思想社
初田亨 2001『繁華街にみる都市の近代 ── 東京 ── 』中央公論美術出版
──── 2003「近代東京の消費空間」都市史研究会（編）『年報都市史研究11消費の社会＝空間史』山川出版社
神野由紀 1994『趣味の誕生 ── 百貨店がつくったテイスト』勁草書房
川添登 1987『今和次郎 ── その考現学』リブロポート
北田暁大 2000『広告の誕生 ── 近代メディア文化の歴史社会学』岩波書店
──── 2002『広告都市・東京 ── その誕生と死』廣済堂出版
木内高音 1928→2007「水菓子屋の要吉」『水菓子屋の要吉』文芸社
児玉花外 1911『東京印象記』金尾文淵堂
今和次郎（編纂）1929→2001『新版大東京案内』中央公論社→ちくま学芸文庫
今和次郎 1971「考現学の思い出」『考現学　今和次郎集　第1巻』ドメス出版
今和次郎・吉田謙吉 1930→1986川添登（復刻監修）『モデルノロヂオ』春陽堂→学陽書房
──── 1931→1986川添登（復刻監修）『考現学採集（モデルノロヂオ）』建設社→学陽書房
ラングミュア，エリカ 2001→2004高橋裕子（訳）『静物画』八坂書房
中村秀之 1996「ヴァルター・ベンヤミンの知覚の政治学」『現代思想』23-4
中谷宇吉郎 1955→1988「寺田先生と銀座」樋口敬二（編）『中谷宇吉郎随筆集』岩波文庫
大島幸助 2002『銀座フルーツパーラーのお客さん ── そのサインと生涯』文園社
佐藤健二 1986「考現学の考古学」今和次郎・吉田謙吉『考現学採集（モデルノロジオ）』学陽書房（1931年建設社発行の覆刻版）
──── 1992「都市社会学の社会史 ── 方法分析からの問題提起」倉沢進・町村敬志（編）『都市社会学のフロンティア1構造・空間・方法』日本評論社
──── 1994『風景の生産・風景の解放 ── メディアのアルケオロジー』講談社選書メチエ
食品総合研究所（編）2001『食品大百科事典』朝倉書店
ジンメル，ゲオルク 1903→1999「大都市と精神生活」『ジンメル・エッセイ集』

平凡社
たばこと塩の博物館（編）1996『マッチのラベル　ポケットのなかの小宇宙』クレオ
東京都東京百年史編集委員会 1972『東京百年史　第五巻』東京都
下島正夫 1989『マッチラベル　明治・大正・昭和・燐票博物館』駸々堂
柳田國男 1930→1993『明治大正史世相篇』講談社学術文庫
吉田謙吉（著），藤森照信（編）1986『吉田謙吉 Collection 1 考現学の誕生』筑摩書房
吉見俊哉 1987『都市のドラマトゥルギー』弘文堂
———— 1992『博覧会の政治学』中公新書